

On *Stamboul Train*

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和63年9月30日 受理)

序

この世の中には何十億という人間が生存している。それぞれの人間は、各人の信念に従ってこの世で生を全うする。金で人生の価値を推し計る者もあれば、政治に生命を賭ける者もある。また、信仰に絶対的価値を見出す者もある。人生の価値基準は千差万別であり、人それぞれによっても異なることであろうが、個人の生活の場の共同体である社会には、その社会を維持するための誰もが守らなくてはならない共通項ともいべき基本的な法、道徳、倫理というものが存在する。このような約束事を個々人がどの程度尊重するかも、これまた千差万別であろうが、大別すれば、社会は個人が生存する場であるが、社会の倫理や道徳よりも個人的な意思や欲望が優先するといった利己的な生き方に徹した人たちがいる。一方、社会を多くの個人が生存する共同体として捕え、社会の発展、維持のためには、ひいては共同体の中で生活する総ての人間にとっての利益の前には、個人の我儘な行動や思惟は二義的なものになるとする道徳的・倫理的な考え方に基づいて生きる人達、あるいは社会の道徳や倫理を特に強く意識している訳ではないが、置かれた環境の中で、ただ真面目に正直に生きている人達がいる。

勿論、微妙な精神活動を行う人間をこのように単純に分類、類型化することには異議もあろうが、“Greene really got into his stride as a writer with the first of his entertainments, *Stamboul Train*.”¹⁾といわれる *Stamboul Train* において Greene は寓話的ともいえるほど単純明快に登場人物をほぼこの何れかのグループに属するように描いている。この各グループに属する人々の特性を分析しながら、人生における一般的な意味での失敗者と成功者は如何なる人間的特質によって決まる傾向が大であるとグリーンが考えているのか追求してみたい。

成功者と失敗者

Stamboul Train において、置かれた環境の中で実にうまく立ち回る人達、つまり、利己的な思惟や欲望が行動の原動力となり、繁栄への道を邁進する人達は、乾葡萄酒商のマイアット、新聞記者のウォレン、泥棒稼業のグリュンリッヒ、憲兵隊長のハーテップ大佐達であろう。彼等に共通していることは、個人的な利益が総てに優先していることである。

例えば、マイアットは、人生のあらゆる事柄を商取引のように考えて、先祖より受け継いだ商人としての優れた才覚とユダヤ人独特の危険を察知する能力を備え、法に触れないまでも倫理的、道徳的には首を傾げたくない限界まで駆け引きを追求する。尚且つユダヤ人であるが故の個人的世界の限界、金力の及ぶ範囲を的確に知っており、常に彼が痛手を受けることなく、置かれた状況の中での最善の結果を導き出している。また、ハーテップ大佐は、その職業柄、最も法や道徳、倫理に忠実でなくてはならないにもかかわらず、法と地位を私的に利用して相変わらず賄賂を受け取り続けている。ウォレンは、特ダネを手に入れるためには無断で他人の鞆の中身を調べるのみならず、相手の身を死の危険に晒すことすら問題としないのである。そしてグリュンリッヒにいたっては法も道徳も問題外である。個人的な利益のためには殺人すら容認するのである。

すなわち彼等にとっては、この社会は個人的な利益を得る場に過ぎないのである。彼等がその場を不正に利用してどれ程の富を手に入れ、贅沢な暮らしをしようが、世間からその不正を非難されなければ、あるいは非難されないようにしさえすればいいのであって、彼等の行為の結果として、陰でどれ程の人達が苦しんでいようとも問題でない。否、むしろそこ迄やりとおせた自分の才覚を誇りとしているのである（“Josef Grunlich, five years and never juggled.” p. 108）。

社会は、一見、法や秩序、道徳や倫理によってしっかりと支えられているように見えるが、実はその社会を構成する大部分の構成員は多かれ少なかれグリュンリッヒによって象徴される如く、陰で人間同士の信頼関係を破ってまでも個人的な利益の獲得を計っているのである。そしてそうした人達はなんら呵責に苦しむこともない。つまり他人を、社会を踏みつけることが個人の利益と深く関わりあっているのである。この人間同士の信頼関係の裏切りこそ『スタンプール特急』の基調を成す旋律である。つまり、小は駅員のラキッチがトランプ遊びで不正を行って愚鈍なニニッチの小銭を巻き上げることから、パードウのウォレンに対する裏切り、エックマンの会社と妻と宗教への裏切り、グリュンリッヒの助役の家の家政婦に対する裏切り、スタインのユダヤ人を隠す為の整形手術は彼の属する種族への裏切りであり、ツィンナーの裁判は法への裏切りであり、ハーテップの賄賂による私腹を肥やす行為は国家への裏切り、そして時期を早まった革命行動は大衆のツィンナーに対する裏切りである。

このような数々の裏切りこそ社会の実態であるにもかかわらず、それでも表面的には社会は秩序を維持し、道徳と倫理の衣を纏って存在しているかのごとく考えられているのである。こうした社会のなかにあって、ハーテップ大佐、グリュンリッヒやウォレンのように不正や裏切りを行い、利益を上げている利口者の犠牲になるのが、社会の法や秩序、倫理や道徳を守って質素に生きているニニッチ、ツィンナーの両親そしてコラルのような正直な人間なのである。彼等は、コラルによって象徴される如く、何時如何なる時も、悪に荷担するにはあまりにも社会的であり、そのために無力であるが故に一時的な同情と憐れみ

を得ることはあっても、現世的な意味において救われることはなく、相手の都合によって、何時も切り捨てられ裏切られる存在なのである。何故なら彼等と関係することが相手に利益をもたらす時にのみ、彼等は存在価値があるのであって、その価値を失った時には、相手にとって彼等のために危険を犯すことなど、ましてや金を出してまで救ってやる価値など存在しないのである。それどころか価値のない者は、小説の中で何度も繰り返し多くの登場人物が「忘れた」と口にするように、個人の意識からも消え失せて忘れられるのである。その結果として、正直に生きているニニッチ、エックマン婦人そしてコラルにはこの世での幸福な人生は約束されることはない。彼等の人生もツィンナーの両親の人生と大差のない人生であることは容易に想像がつく。

利口な人間の行動の基準は飽くまで個人的な利益と安全である。その証拠に *Stamboul Train* の中ではコラルとツィンナーは他の乗客達によってその人間性を評価されることは一度としてなく、常に金や安全性と結び付く対象として捕えられているのである。例えば、マイアットは、コラルのことを“he thought, she's nothing new ; pretty and kind and common, you can find her any night on the Spaniards road,”²⁾ というように彼女の人間性に対する愛情から彼女に引かれたのではなく、金で手に入る女として見ているのである。この考えは、パードウとの結婚にも当てはまる。また、ウォレンは一度としてツィンナーの革命家とならざるを得なかった動機について関心を持ったことはなく、自分の週給を上げる対象として見ているだけである (“‘I reckon that you are worth four pounds a week to me.’” p. 73)。グリュンリッヒはコラルとツィンナーと彼との3人で逃亡を企てれば、足の遅い老人と女が追手の注意を引き、足の速い自分のみが助かる可能性を計算し、実際に2人を見捨てて首尾よく逃走したのである。そしてハーテップ大佐は、彼等が支配している国家にとって好ましからざる人物であるツィンナーを闇から闇に葬り去ることに何の良心の呵責も覚えないのである。社会はこうした考えに基づく一部の人間に支配されているのである。

利口な世事に長けた人間は、個人的な利益のため健全な社会を蝕み、腐敗させていくのである。*Stamboul Train* の世界は“The Destructors”³⁾の子供達によって外壁のみを残して内部を完全に破壊し尽くされた Old Misery の家のように外面だけは何とか体面を維持しているが内部は腐乱した世界なのである。この事実はもう一つのタイプである道徳的・倫理的な人々——コラルは汽車のなかで同席した Peters によって、また、瀕死の重傷を負ったツィンナーを助けることもせず逃亡したグリュンリッヒによって、ツィンナーは彼の政治活動や実生活によって——も否応なく認識させられている。その結果コラルは“‘I'm tired of being decent, of doing the right thing, she thinks. This is a state of mind to which many of us are driven at some time or other ; decency seems to get you nowhere.’”⁴⁾ 従って“‘When Coral Musker decides, when she is barely out of her teens, that reality is dreary and ugly and depressing, she is making an affirmation on behalf of author.’”⁵⁾

つまり、正直、誠実、慎ましき、真面目さといったものは観念的には尊重されるべきものであっても、実生活における世俗的な意味での幸福、豊かさ、成功にとっては負の要因となりがちなのである。換言すれば、社会の中で社会秩序を維持し、社会の発展を願って生きている者は、反社会的な生き方によって個人の利得を目論み、ひいては社会秩序の崩壊に手を貸している者達の餌食になるために生きているようなものであるといった皮肉な結果になるのである。そのようなことも認識できず、得にもならないことにも誠実に生きようとするツィンナーは、ウォレンにいわせれば、“‘a clever man would never have given evidence. What did Kammetz or the child matter to him? He was a quixotic fool.’”⁶⁾ということになる。

このことから“Ours is a fallen world : novelty dies or sours, while mercenary motives and heartless people like Mabel Woren, Jannet Pardoe, Grunlich, and Eckman prosper.”⁷⁾という何ともやるせない世界が展開するのである。このやるせなさは、現実世界を全く認識できていない人気作家の J.B. Savory の“ ‘But one ‘opes, one ‘opes, that it’s something of this sort, to bring back cheerfulness and ‘ealth to modern fiction. There’s been too much of this introspection, too much gloom. After all, the world is a fine adventurous place.’”⁸⁾という馬鹿馬鹿しい無知さによってより鮮明に浮び上がってくるのである。

それでは正直で、真面目な、誠実な人間はこの世でどのように生きていけばいいのだろうか？ この問に対するグリーンへの解答はコラルとツィンナーの運命のなかに明示されているといえるだろう。

ひたすら誠実に生きてきたコラルは過労がもとで心臓を悪くし、レズビアンウォレンの囲い者となる運命にあるが、その将来に何の明るいものも期待することはできない。一方、ツィンナーは、理想主義に固執して生きる苦しさ、期待されることの責任の重さ、自分の非力の空しさに耐えきれなくなって、自分の行為の正統性ではなく、必然性を自らに納得させ、自殺行為ともいえる死を賭した裁判に臨むが、このような『グリーン不幸な反逆行為——逃亡や自殺——は、脱出に対する確信というより、むしろ絶望の中で企てられたものである。言い換えれば、それらは単なる抗議声明にすぎず、前もって失敗することが運命づけられていたものであった。』⁹⁾と説明されているように彼等2人の人生の結末から、我々はこの世において善なるものの弱さと儂さを、そして、悪なるものの強さと執拗なることを知るのである。

. . . . His mother and father bobbed at him their seamed thin faces, followed him through the ether, past the rush of stars, telling him that they were glad and grateful, that he had done what he could, that he had been faithful . . . He wanted to say to them that he had been damned by his faithfulness, that one must lean this way and that, but he had to listen all the

way to their false comfort, falling and falling in great pain.¹⁰⁾

. . . . I'm tired of being decent, of doing the right thing. Her thoughts were very close to Dr Czinner's when she exclaimed to herself that it didn't pay.¹¹⁾

コラルやツィンナーのような善に根差した人間は、悪に染まった人間たちに汚染されている社会では悪に染まった者達が社会の正統かつ主要な構成単位であり、善に根差した彼等はむしろ異端分子である。そのような異端分子は、遅かれ早かれ主要な構成分子からの攻撃に晒され、餌食となるのがこの悪に染まった社会の中では当然の成りゆきとなるだろう。

結 語

Samboul Train の最終章はイスタンブールで車を降りた乗客達が車の中での出来事がまるで夢の世界でもあったかのように各人の元の世界に戻っている。つまり、マイアットはスタイン氏との商取引に、パードウは相変わらず成り行き任せの安易な生活方法に身を委ね、ウォレンはパードウの替わりとなるコラルを手に入れウィーンへの帰路につく、ハーテップ大佐も目の上のコブともいえる邪魔者のツィンナーを葬り去り、従来通りの法の守護神のような顔をして私腹を肥やし続けることであろう、グリェンリッヒも泥棒稼業に精を出すことであろう。

こうして見てくると、この世では人間の誠実、真面目、責任、良心といった善に基づく特性は人間の救いとはならず、逆に狡猾、不誠実、鉄面皮、裏切りといった人間性の悪に属する特性が悪に染まった現代社会を支配し、その特性をより多く備えている者が繁栄するという皮肉な結果を生じているのである。このグリーンの世界をクルスレスターは次のように述べている。

The theme of crime and violence becomes a comment on our age, an age whose disorder is personified by heroes of the entertainments. Isolated, hunted and haunted by guilt, anxiety and desire for revenge, they accept the way of violence because life, as they see it, demands it. They are the agents and/or the victims of violence. They live in an extremely horrid world of fear, squalor and betrayal, and the only way out for them is the infliction of harm on others and on themselves.¹²⁾

他人に害を加えることが出来なければ、自らに害を加える以外に救われる道がないとするならば、この現代世界は何という悲惨な世界なのであろうか。この *Samboul Train* が執筆された1930年代はそのような時代であったのだろう。しかし *Samboul Train* の世界は、この世は全く人間的な救いなど存在しない闇の世界として描かれているのではない。グリーンは小説の中で、コラルは全く無信心者として、ツィンナーは信心深い家庭に育ちなが

ら、共産主義的理想を信じるあまり自ら宗教を捨て去った者として描かれている。

He was shocked by the ease of her disbelief, which did not come from the painful reading of rationalist writers and nineteenth-century scientists, she had been born to disbelief as securely as he had been born to belief. He had sacrificed security in order to reach the same position, and for a moment he longed to sow in her some dry plant of doubt, a half-belief which would make her mistrust her judgement.¹³⁾

にもかかわらず、彼等は、共に全く希望の持てない境遇、無力な状態に置かれたとき、神の存在に対する疑義とは無関係に、神にすぎり、祈る行為のなかに人間の英知を超越したあるものに究極的な拠所を求めていることが判る。

He watched him with a kind of ashamed greed, for he was about to surrender to a belief which it had been his pride to subdue. But if it gives me peace, he protested, . . .¹⁴⁾

. . . . The girl sat with her thumbs joined and her head a little bent. He knew what she was doing ; she was praying that her lover would come back for her soon, and from her secrecy he guessed that she was not accustomed to prayer.¹⁵⁾

我々は、ここにグリーンンの *Stamboul Train* 以前の作品、*A Man Within* においても扱われ、其の後の彼の作品の大きなテーマとなる宗教的な救い、あるいは問題が絶望した人間の心の中から必然的に浮び上がってくることを知るのである。

参考文献

- 1) Grahame Smith, *The achievement of Graham Greene* (Sussex : The Harvester Press. 1986) p. 22
- 2) Graham Greene, *Stamboul Train* (London : William Heinemann & The Bodley Head. 1982) p. 142
- 3) Graham Greene, *Collected Stories* (London : The Bodley Head & William Heinemann. 1974) この短編集の中の“The Destructors”においてグリーンンは、人間の心奥には善悪を超越して、純粋に破壊活動に傾倒することに異常な魅力を感じる特性があることを描いている。従ってそのような特性に対して何らかの悪の要因を持つ動機付けがなされた場合、人間は時として想像を絶する破壊活動を行う可能性がヒトラーによる戦争と、純粋な子供達による破壊活動という形で描写されている。
- 4) John Atokins, *Graham Greene* (London : Calder and Boyars. 1966) p. 36
- 5) *Loc. cit.*
- 6) Graham Greene, *Stamboul Train* p. 45
- 7) Harry T. Moore, ed. *Crosscurrent/Modern Critiques* (Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University Press. 1972) p. 46
- 8) Graham Greene, *op. cit.*, pp. 68—69
- 9) Philip Stratford, *Faith and Fiction Creative Process in Greene and Mauriac* 1964 渡辺 洋, 小幡光正共訳, 『信仰と文学』—— グレアム・グリーンとフランソワ・モーリャック (白水社 1985) p.

79

- 10) Graham Greene, *ibid.*, pp. 223—224
- 11) *Ibid.*, p. 224
- 12) J.P. Kulshrestha, *Graham Greene The Novelist* (New Delhy : Macmillan India Limited. 1977) p. 180
- 13) Graham Greene, *ibid.*, pp. 181—182
- 14) *Ibid.*, p. 137
- 15) *Ibid.*, p. 181

On *Stamboul Train*

Toshihiko UEKI

*Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1988)

In *Stamboul Train*, the first entertainment of Graham Greene, he roughly divides the characters in the novel into two groups ; one consists of people who live honestly keeping the law, ethics and morality, the other people who attach more importance on private profits than keeping the law, ethics and morality.

In this paper, I want to analyze the human characteristics of the two groups and throw light on what characteristics of human natures Greene thinks a personal prosperity in this world is liable to depend.